

東雲八夫

平成ゆとり童話

アニメ
ゲーム

細長い、公園。道と道の真ん中にある。道の外側は、ビルが立ち並ぶ。

青年と、ギター。向かいのベンチには老人。

青年は、空に向かって叫んでいるように見える。その前を、時々スーツが横切る。

老人は、ゆっくりと立ち上がり、青年の横に並んで座った。

青年は、気にしているようだが、歌はやめない。反社会的な歌だ。

「殺す気で、歌え」

老人が呟いた。ギターはやまない。歌も。

誰をだ。青年は、そう思った。

それだけ言い、老人は去っていった。

社会だか、世界だか知らないが、とにかくきれいなものがあふれていた。多分、嫌われているから、嫌いなんだ。

青年は、ますます、その嫌いなものを嫌った。不満を、歌にした。歌ならば、許されると思っていた。いわゆる、反社会的。そんな歌を作り続け、人の前で歌い始めた。おかげで、孤独はますます深まった。

もっと、嫌ってやる。もっと。もっとだ。

誰。何。それは曖昧なままだった。

歌と、ギターの音色の隙間から、しわがれた声が聞こえてきた。それは、昨日の話。

夜。警備員のアルバイト。公園沿いのビル。

青年は鍵を開け、屋上へ出た。今日は、金曜日。ふらつく大人たちと笑い声。それらが、地下へ消えていく。

老人が座っていたベンチ。殺す気で。

誰をだよ。

八日後、青年はまた歌っていた。ベンチ。また、あの老人だった。向かい合うような恰好だ。老人は、ぼんやりとこちらを見ている。

この、悪人面め。

老人は、何も言ってこない。青年は、気にしないようにしていた。

その日は、祭だった。夜は、アルバイト。

また、見下ろす。公園は、光に包まれている。光は長く伸び、街を照らす。様々な音があふれている。皆、笑っている。

座っていた。一人。笑顔の中に、一つ、あの悪人面だ。皆、疑いようのない、善人に見える。

神輿が、近づいてきた。さらに、音は大きくなる。

不意に、老人が顔を上げた。目が合う。何が殺す気で、だ。

老人は口元だけで、笑った。光が、強くなる。真下。

中指を立てていた。何か、言った。老人。

「死んでしまえ。この、くそじじい」

青年は身を乗り出し、叫んだ。消えた。一瞬だけ、白んだ。ベンチには、もう誰もいない。だれも、自分の声に気づいていない。光と音が、遠のく。むなしさが、こみ上げた。真夜中になっても、外には人の気配があった。

巡回を終えて、青年はまた街を見下ろしていた。ベンチには、カップル。暗い管理人室へ戻った。パイプイスに浅く腰をおろす。

なんだったんだ。

眠りに、落ちていく。わずかに、意識は残っている。

老人。また、自分を馬鹿にしている。どうして、こんなにもみじめなのだろう。社会だが、世界だか知らないが、苦しい。

僕が、おかしいのか。おかしい。そう、言われてきたような気がする。ずっとだ。僕が、悪いのか。何が、悪い。

屋上から見た景色。祭。老人。割れていく。景色。離れていく。笑顔と悪人面。

誰だ。お前ら。

パイプイスから、半分落ちそうになりながら、目を覚ました。

顔。社会だか、世界だか知らないが、そいつの顔を見た。どうして、こんなにみじめになるのか。

顔は、ジグソーパズルのようなものだった。うまいこと、できていた。

奴らは、善人ばかりで作られた、悪人面で脅し、非難する。こちらが腹を立てれば、善人ばかりの善人面で、善人が正義を語る。

もっと、尖らせなくてはいけない。

そういう意味か。

ピースを動かしている、悪い奴だけを、狙って。

じいさん。あんた、悪い奴だったか。外すわけには、いかないな。

でも、僕は、殺される気で歌う。